

第十一章 災 害

一、昭和十三年の大洪水と災害の復旧

(一) 昭和十三年九月五日の大洪水 前日から降り続いた雨は五日の朝から更に降りしきり、風さえ加わって漸次悪化して大暴風となり、見るみるうちに大洪水となって田畑は流失し家は崩れ県道・町村道および橋梁は流失し、災害は目もあてられざる惨状となり、村役場と地方との交通・通信は絶たれた。しかし翌日直ちに連絡をとると共に、村当局と村民はこれが復旧に全力を注ぎ、全吏員を動員し全村に涉って被害の調査と衛生および救済に努め、つぎに、交通に対する復旧と物品の輸送を計り被災者の救援につとめ、農協および商店の米を集めて炊き出しを行い、県に救援を求めた。そこで県からは直ちに救援物資・救護金等を送られ、一方学校職員・児童は勤労奉仕団を組織して、県道仮道作業を行って交通を計り、川島土木出張所の全員が出動して復旧につとめ、隣村の応援と郡農会・鬼籠野村から白米・金品の義損、県立農業学校・浦庄村青年学校生徒・藍畑青年団員の来援があり、何れも食糧携帯で小学校に宿泊して、尊い労力奉仕を行い、緊急を要する県道の修理を成就することができた。被害地の主なものは左の通りで、国および県の補助を得て昭和十四年から三カ年の予定で復旧したが、戦争と物資・資材の不足のため困難に困難を加え、代表者の努力は実に涙ぐましいものがあった。

さらに昭和十六年八月十五日・十月一日の颱風によって被害を受けたが、昭和十六年・十七年・十八年の三カ年間に補助を得て復旧することができた。

二、災 害 土 木

番 号	路 線 名	箇 所	工 事 金 額

国補	一二二	町村道左右山線	大字下分上山字左右山新橋ノ下	三三二
"	一五七	宮前橋	西寺宮前橋	一四〇〇
"	一一〇	喜來谷線	大久保横川宅前	三一〇八
"	一二五	拜府礮石線	宇井岡本宅前西	五八三
"	一一三	喜來谷線	下喜來落ノ跡	二二九八
"	二	北岸線	西寺	八三四
"	二五四	栗生野線	栗生野栗生野橋	六二六五
"	二五二	矢ノ内線	矢ノ内矢ノ内橋	五五九
"	一〇六	南山線	東稻原西光寺処	五八一
"	二五六	大久保谷口線	大久保大藤東	七〇〇
"	二五八	地中線	大字左右内字鍋岩鍋岩橋	一三五二
"	一〇四	黒口横倉線	黒口杉林ノ上	七五二
"	一〇五	黒口横倉線	黒口	一六〇
"	一〇七	宮前水舟線	大字下分上山字東寺岩屋ノ谷ノ上	一五三六
"	一〇八	宮前水舟線	西寺東寺界	六二五
"	一〇九	喜來谷線	大字下分上山字安吉眞道分岐点の処	一三〇九
"	一一一	"	大久保	一二六四
"	一一二	"	下喜來喜來谷橋の上	一一八五
"	一一四	"	久保の谷の処	五五七
"	一一五	"	古田の処	九一四
"	一一六	"	蛇淵の処	一一二四
"	一一七	"	中喜來公会堂の前	一六五八
"	一一八	"	公会堂の上	六一七
"	一一九	"	西良の処	九〇二

三三四

"	一一〇	中内線	焼山大岸橋の処	八二七
"	一一一	櫻谷線	上中内黒田宅の前	七〇七一
"	一一三	竹平線	宇井字井橋の上	八五三
"	一一四	拜府礮石線	竹平終点の処	七三八
"	一一六	喜來谷線	宇井齋藤宅の前	六七七
"	二五一	左右山線	下喜來喜來谷橋	一三三八
"	二五五	馬地路	左右山新橋	一五六六
"	二五九	順拜線	大字左右内字黒口第二天黒橋	一二七九
"	二六〇	喜來谷線	釘貫一の瀬橋	一五一八
三	五	竹平線	大字下分上山字大久保	一〇〇四
五	八	左右山谷線	下中内竹平橋	一七四五
八			左右山	四二〇八四

(三) 県費補助

町村道寺久保線 大字下分上山字西寺馬岡谷橋

南山線	二九八	二〇〇
喜來谷線	一五〇	一五〇
栗生野地野線	四五〇	三八〇
"	二五〇	一五〇
櫻谷線	一五〇	一五〇
矢の内線	四二〇	一五〇
大久保名本線	三二〇	一五〇
西稻原線	三二〇	一五〇
鍋岩庄部線	三二〇	一五〇

工事金額

(四)

被害耕地および公共施設

喜来谷線 大字下分上山 長野線 字長野長野橋

二二〇 四五〇

地区の所在	施行主体名	種別	数	量	被害状況	復旧見込金額
大字下分上山	矢内勝蔵外三百一名	耕地	一三五、六一二歩		崩壊	四〇一六五円
大字左右内	阿部八郎平外六十二名	耕地	三四、一〇二		埋没及流失	一三〇八四
大字下分上山	栗飯原半次郎外二百三十七名	耕地	一一一、四二五		埋没及流失	八四六四五
大字左右内	西浦鹿一外三十四名	耕地	一五、四二四		埋没及流失	六七七〇
大字下分上山字栗生野	栗生野用水	水路	五三〇間		欠潰流失	八四〇〇
南山	南山	水路	二〇〇		欠潰流失	一一〇〇
大石ノ本	大石ノ本	水路	三〇〇		欠潰流失	一三〇〇
矢ノ内	矢ノ内	水路	五〇		欠潰流失	二〇〇
西稲原	箱石	水路	四五		欠潰流失	二〇〇
左右山	新開	水路	七〇		欠潰流失	一五三〇〇
西寺	西寺	水路	七三		欠潰流失	一〇〇〇
谷口	谷口	水路	八〇		欠潰流失	三〇〇
大久保	大久保	水路	三〇		欠潰流失	一〇〇
安吉	安吉	水路	六〇		欠潰流失	一六五〇
今井	今井	水路	二〇		欠潰流失	三〇〇
今井大	今井大	水路	二〇〇		原形なし	六〇〇

地区の所在	施行主体名	種別	数	量	被害状況	復旧見込金額
三ツ木	三ツ木	水路	一一八		欠潰	一〇〇〇
東谷	東谷	水路	三〇		欠潰	一六八〇
横野	横野	水路	七〇		欠潰	七五〇
川久保	川久保	水路	五〇		欠潰	二三七〇
上中内	上中内	水路	九〇		欠潰	四五〇
竹平	竹平	水路	七五		欠潰	一〇〇〇
戸人	戸人	水路	四五		欠潰	二二五〇
榑府	榑府	水路	四五		欠潰	七〇〇
榑谷	榑谷	水路	九〇		欠潰	五〇〇
宇井	宇井大川	水路	五〇〇		欠潰	三二〇〇
宇井	宇井上	水路	七〇		欠潰	一五〇
宇井	宇井下	水路	三〇		欠潰	一〇〇
中喜来	西良ノ谷	水路	二五		欠潰	一〇〇
焼山	焼山	水路	一三		欠潰	七〇
東稲原	上神	水路	四五〇		欠潰	九〇〇〇
大字左右内字鍋岩	鍋岩	水路	四三		欠潰	三五〇
松坂	松坂	水路	四〇〇		欠潰	二〇〇
左右内	左右内	水路	七〇		欠潰	一五〇
釘貫	シヨウネ	水路	一六〇		欠潰	二四〇
黒口	黒口	水路	九〇		欠潰	六三〇
大字下分上山字東稲原	上神用水堰	堰堤	四〇		欠潰	四七〇〇
栗生野	栗生野	堰堤	四〇		欠潰	三〇〇〇

大字下分上山字西稲原	稲原用水	堰堤	四五間	欠潰	五〇〇〇円
字井	字井	〃	二五	〃	三〇〇〇
左右山	今井	〃	一〇	〃	二〇〇
安吉	西ノ瀬	〃	四〇	〃	一〇〇〇
大字左右内字鍋岩	鍋岩	〃	一五	〃	二五〇
計	耕地	三〇六反七〇三	一四四六六四円		
水路及堰		三八七七間	八二八九〇		
復旧見込金額合計			二二七五五四		

三二八

以上の通りの被害で、県に助成の申請をしたところ、左の復旧耕地事業費の配当を得た。しかし人夫・資材の關係と支那事変中のため責任者は幾多の困難に遭遇したが、これが復旧に全力を注ぎ、ついに完成をとげた。

大字下分上山字京地	京地農道	農道	五〇間	欠潰	一五〇円
南山	南山	〃	五〇	〃	一五〇
箱石	箱石	〃	四〇	〃	一〇〇
今井	今井	〃	二〇	〃	四二〇
三ツ木	三ツ木	〃	三五	〃	三三〇
中谷	中谷	〃	三〇	〃	三〇〇
東稲原	東稲原	〃	一二〇	〃	三〇〇
矢ノ内	矢ノ内	〃	六〇	〃	一五〇
中内	中内	〃	五〇	〃	一五〇
字井	字井	〃	七〇	〃	五〇〇
大字左右内字鍋岩	鍋岩	〃	五〇	〃	一〇〇
計			八四五		二六五〇

(四) 昭和十三年風水害復旧耕地事業費配当調査

事業種別	数量	事業費総額	事業費年度割分	
			昭和十三年度	昭和十四年度
耕地復旧	田二四八反 畑六五反	六四六五六円	一円	一円
公共施設復旧	二七九四間 七カ所	五四七〇〇	三九七〇	七〇四〇
計	三一三反 二七九四間 七カ所	一一九三五六	三九七〇	七〇四〇

以上の通りの配当であったが、県の予算等の關係によつて、昭和十六年へ繰越となり、完成した。

三、昭和十六年颱風被害

昭和十六年八月十五日の颱風により、被害を受けた者は左の通りであった。

地区所在地	事業主体名	種別	数量	被害額	復旧見込額	被害状況
大字下分上山字左右山	今井用水	水路	三七米	五〇〇円	八〇〇	決潰
北中稲原	栗生野	〃	三六六	五〇〇	一五〇〇	埋没決潰
今井	稲原	〃	二〇〇	五〇〇	七〇〇	水路埋没
三ツ木	三ツ木	〃	三〇	一〇〇	二〇〇	決潰
東稲原	上神	〃	五〇〇	三〇〇	一〇〇〇	水路埋没決潰

三二九

地区	所在地	事業主体名	種別	数量	被害額	復旧見込金額	被害状況
"	下喜来	落ノ跡	"	五〇	二〇〇	三〇〇	"
"	矢ノ内	泉奥	"	五〇	二五〇	三〇〇	水路決潰
"	長野	長野	"	一〇〇	三五〇	五〇〇	"
"	上中内	中内	"	五〇	二〇〇	三〇〇	"
"	三ツ木	新開	"	三〇	二〇〇	三〇〇	"

(三) 昭和十六年八月水害復旧耕地事業費配当調査書

地区	所在地	代表者名	種別	数量	被害額	同上年		
						十六年度	十七年度	十八年度
大字下分上山	矢ノ内外十字	代表者名賀石次太郎	耕地	五反	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	石垣崩潰埋没流失
"	安吉外五字	大西幸賀	"	七	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	"
"	上中内外五字	仁志勝三郎	"	一〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	"
"	下喜来外三字	中川光弘	"	三	五〇〇	五〇〇	五〇〇	"
大字左右内	鍋岩外三字	阿部国治	"	八	一五〇〇	一五〇〇	一五〇〇	"
事業主体名	工程	数量	関係地積	事業費	同上年			
下分上山	耕地	畑一一反二	一四反	一八九〇円	十六年度	十七年度	十八年度	
下分上山	水路	五五六	一三〇	二七九〇	六三〇	六三〇	六三〇	
計		七一	三	一〇〇〇	九三〇	九三〇	九三〇	
		七一	一三三	三七九〇	三三三	三三三	三三三	
					一二六三	一二六三	一二六四	

昭和十六年十月一日の台風により、被害を受けた者は左の通りであった。

地区 所在地 代 表 者
大字下分上山 西稲原外七字 大 知 兵 太 郎

宇井外六字 西 岡 栄 幸
西大戸 白 滝 安 一
名本外二字 井 上 和 太 郎
大字左右内 左右内外一字 中 村 節 春

四、昭和二十五年ジーン台風・キジャ台風

昭和二十五年八月末から降雨量が多く、殊に九月三日のシェーン台風に引続き、十二日・十三日キジャ台風の来襲によって農作物は甚大な被害を蒙り、昭和十三年に次ぐ大洪水であった。昭和二十一年以降の災害土木事業は次の通りである。

災害復旧土木事業一覧表

災害年度及名称	路線名	箇所	工種	延長	工費	竣工年度	備考
(一) 昭和二一・七・二九暴風雨	宮前水舟線	水舟神刺岩の処	土留石積	一五米	一二、七五六	二三	県補助
	喜来谷線	中川宅の前	"	八	五、〇八三	"	"
	"	長野宅の下	"	七	四、三六六	"	"
	"	長野宅の上	"	二三	一六、六一一	"	"
(二) 昭和二二・七・九一〇	喜来谷線	喜来谷橋	橋梁再架	一五	五六、七四四	"	国補助
	"	蛇淵の上	土留石積		四、五〇〇	"	県補助
	"	中喜来堰堤の処	"		四、〇〇〇	"	"
(三) 昭和二三・六・八	喜来谷線	喜来谷線	土留石積	一六	六六、〇〇〇	二四	国補助
アイオン・リビー台風	"	"	"	二六	二二五、八〇〇	"	"

(デラ台風)	宇井橋梁(竹平川)	一五〇、〇〇〇	昭和二十七年
"	西寺久保農道	一九八、〇〇〇	"
"	栗生野農道	一一二、〇〇〇	昭和二十八年
"	栗生野橋梁	三〇〇、〇〇〇	"
"	中谷農道	二二〇、〇〇〇	二十五年
"	横倉農道	二四九、〇〇〇	"
(デュディス台風)	左右山水路	二二〇、〇〇〇	"
"	鍋岩水路	一〇六、〇〇〇	昭和二十八年
(二) 昭和二十五年災害 (ジエーン台風)	宇井護岸(竹平川)	三二二、〇〇〇	昭和二十六年
"	地野農道	一五〇、〇〇〇	"
"	栗生野農道	二九三、〇〇〇	"
"	上神水路	一九三、〇〇〇	二十五年
"	新開水路	一六六、〇〇〇	"
"	竹平水路	一八四、〇〇〇	"
"	三ツ木水路	二二〇、〇〇〇	二十七年
"	栗生野水路	二〇〇、〇〇〇	"
"	稻原用水	一八四、〇〇〇	二十五年
"	今井用水	一五一、〇〇〇	"
"	矢ノ内水路	一五四、〇〇〇	二十八年
(三) 昭和二十六年災害 (ケイト台風)	松の本農道	一三〇、〇〇〇	昭和二十七年
"	横倉農道	一九五、〇〇〇	"
"	左右山水路	二九五、〇〇〇	二十八年
"	竹平護岸	三四三、〇〇〇	"
(ルース台風)			

(四) 昭和二十八年災害	地野橋	一七二、〇〇〇	"
"	中内堤塘	一四〇、〇〇〇	二十九年
"	落の跡頭首工	一三六、〇〇〇	"
(五) 県単独土地改良工事	字大久保機械揚水水路農道	五二二、〇〇〇	二十九年
(六) 護岸復旧工事県施行箇所			

1、昭和二十七年施行

字安吉上山橋の所	お亀石上	原一義裏
" 大ざれの下		
" 鮎喰川左岸田中宅の前	馬場尻の金網	
右岸お亀石の下	栗生野橋の下	
吉川宅の所	河野サヨ下	
	栗飯原幸太郎裏	
2、昭和二十七年以降施行(二十八年・二十九年に完成)		
宇井橋下楠本の前		
白尾の下		
山口高一裏		

六、地 七

(一) 範圍 本村の地は、全村に亘って大小無数にあり、一々数えるにいとまがない程であるが、主として鮎喰川の南岸に多い。この中で、営林署として砂防工事を施行したのは別表の通り六カ所である。何れも断崖絶壁の大崩壊であるが、その中でも字三ツ木山中にある新崩・字左右山の山中にある青崩の如きは急峻であって、何時も大小

の岩石・土砂が落下して居る。この工事中、村長・村議会議員は時々現場を訪うて慰問ならびに激励した。

(二) 工事 この工事の着手は昭和二十三年五月廿九日であった。その危険な事は筆舌に尽し難く、思わず身振いする有様で、また時には負傷者を出したこともある。この様な有様で、最初は地方の工夫は就業を好まないため使用人員も少く、従って作業の進行も遅々として進まなかった。昭和二十三年七月五日から昭和二十四年八月十五日まで、徳島刑務所から受刑者百二十名を雇い入れて工事を施行した。その結果は非常に好成績を得て、工事は着々として進んだ。村民も最初は異様な目を以て迎えたが、意外に純朴で、村民とも親しみが出来、慰安として歌の夕を催したり、また色々の物品を贈って心から慰めたりして、いよいよ親睦を深めると共に、作業は予想外に進行した。これに力を得たのか、地方の工夫も逐次その数を増し、工事はますます速度を加えて進行した。

その工法は、石垣を積んで段々畑となし、これに茅・アカシヤ等を植えて、これが崩壊を防止したものである。その結果、所期の目的を達することが出来た。

本地より工事は県下において屈指の大工事であり、また極めて難工事であった。とりわけ戦後労務資源の少ない折であり、一般労働者の気分も荒んでいて村長中島隆衛氏の心労は一通りではなかった。特に工事遂行に努力した畠中嘉太郎氏・地元の稲飯喜六氏の功績は、特筆すべき多大なものであった。なお当時の森本・粟飯原両県議会議員の協力もあずって力となった。

(三) 下中内の地亡 前者と並行した字下中内において、他とは全然趣を異にしている。この場所は、それほど急峻でもないが、地下に青白色の粘土層があって、これが水に溶け易く、雨水と共に流出して空間を生じ、それが陥落して地亡りを起すのである。これは新潟県と共に、全国に知られている由である。以下伝説・口碑と現実について記すこととする。

1、大異動は、口碑によると今から約二百五十年前の享保の頃に起ったという。一大音響と共に、上山川（鮎喰川）



地崩山木三

南岸の字三ツ木の山嶽から大異動を始め、字下中内にあった宏大な弥玄寺と経塚、ならびに疎らにあった人家を埋め、遂に上山川を北岸に越えて、字安吉に土砂・竹木を押し流した。而して字三ツ木にあった神を祀った小さい祠や竹林等は有姿のまゝ現在も存在していて、その移動の距離は約一キロメートルに及んでいる。このために上流は一大泥海と化した。その土砂は前記の如き泥土の混合であって、このために上山川の激流は、南方約百メートルの所を流れるようになり、川の流れが原の川よりも南方へ移動したのである。現在県道の北にある低地はこの原の川の跡である。これを享保の大洪水と称し、村内各所に大被害があった。

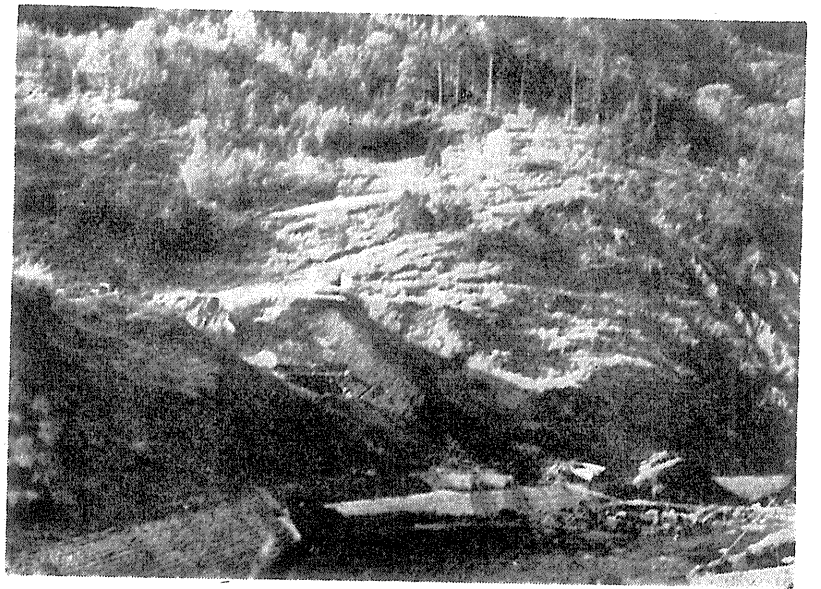
2、その後は、夏期の出水毎に亀裂を生じて、諸所に陥落的な移動を生じたが、大した事もなく、明治二十二年には、この地亡地区の中央に、下分上山村立伝染病院を創設し、昭和十三年まで現存したが、またまた大移動を生じて、今は家も屋敷も見ると影もないまでに上山川へ押し流されたのである。

内務省は、昭和十二年に、移動防止のために、土地の凹凸を押し均して松坑を打ち、竹のシガラミを張る工事

を、三千円の工費をもって施行したが何の効果もなくその後移動はいよいよ激しくなった。

農林省は、昭和十四年に、火薬の爆破による人工地震を起す実験を試み、あるいはボーリングを行い、あるいは数カ所に深い井戸を掘って、水の深さや泥土層の厚さを調査した。その結果、泥土は鮎喰川の河底よりも深い様である事が判明した。

3、その後農林省によって、昭和十七年まで、種々研究的に山の地面を掘り均して段々畑を作り、アカシヤ・茅等を植え、あるいは地上にセメントで水路を作って雨水の浸透を防ぐ等、相当の工費を投じて、これが防止に全力を注いだ。昭和十七年一月十八日には、白尾地江工事の地鎮祭が執行せられ、農林省の土居技師・県林務課の小坂課長・武田技師・井上県会議員等が列席した。しかし切角の工事も何の効果もなく、大雨出水の場合には、不思議にも一週間乃至十日の後に、大亀裂を生じて陥落または移動し、工事の跡は破滅し去って努力は無に帰するのである。その中に大東亜戦争は次第に激烈となり、人も物資も段々缺乏したために、自然中止の己むなきに至った。



白尾の地江り地帯

この現地は字下中内であるにも拘らず、農林省経営当時の記録の誤りから、何等の關係もない対岸の地名を採って「安吉地江」と称して施行されたのであるが、これは後世を誤るもので、あるいは安吉に土地の大移動があつて大工事が行われたかとの疑念を抱かせる虞があるから、こゝに明記して、下中内地江であることを示して置く。

四 終戦後 になって、昭和二十三年、今回は営林署が工を起した。その工法は、前とは全然趣を異にし、先ず鮎喰川にセメントを以て堅固な護岸を築造して河水の侵蝕を防ぎ、諸所に横穴式によって地下水を誘導し、水路によってこれを鮎喰川に流出せしめ、山の地表面は段々畑とし、あるいは斜面を平均して、これに土砂移動防止植物を植え付けて、この工事を完成した。この工法が当を得たものか、その後移動は一応停止している。

この工事は、昭和二十三年に工を起し、昭和三十一年三月に完成したのであるが、その工費と人夫数は左表の如き莫大な数字に上っているのである。

営林署 砂防工事表

1、着手年月日	2、竣工年月日	昭和二年五月二九日	昭和三年三月三一日						
地区	新崩	滝脇	青崩	三ツ木	稲原	安吉	計		
2、工事面積(町)	1.11町	0.4町	2.0町	0.4町	4.4町	11.3町			
3、工事費(円)	11,410,000	1,022,830	2,264,730	277,110	1,811,260	4,910,340			
年度	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	計
4、人夫数	1,196名	1,180名	2,238名	2,117名	2,281名	2,800名	3,582名	2,896名	

(四) 上中内の地江 昭和十三年九月五日に、字上中内込山に起つた大移動で、安吉(下中内)地江のように広範囲ではなかったが、二反余歩を占める約四〜五十年生の杉・檜林約三百本の立つ地域の異変である。移動地から約百メートルぐらいの所にある家に住む近藤和太郎氏が、ふと便意を催して便所へ行きかけたところ、前記のような大木の

林が、不思議にも立姿のまゝ徐々に下り下っている状況は、さながら小山が移動しているようである。余りの恐しさに家に逃げ込んで家族に話しても、誰も本当にしなかったことである。この移動で、附近にあった山口・黒田の両家押し潰し、二人の生命を奪い、一人の重傷者を出し、牛二頭を埋め、さらに附近の田畑を土・砂と、何千貫という大岩石で埋め、その余勢は七百メートル下の篠原の納屋を押し潰したのである。なお前記の立木は、二百五十メートル滑降して倒れ、田畑や屋敷に流入し、あるいは遠く千五百メートルを距てた鮎喰川に流入した部分もあって、当時これに直面した人々は生きた心地がなかったという。而して平素この谷には水流は少しも無いので、これを目撃した筆者は、昔日の安吉の地這りの口碑を如実に反復するものと思ひ、その悲惨な状況は現在もなお目前に見る想があるのである。こゝに記して以て後日に残し、一朝有事の場合に備えて、これが対策を常時から研究して置く必要があることを警告するものである。

(篠原 吾一)